

論文

ファニー・ルウ・ヘイマーのフリーダム・ファーム
協同組合と草の根ボランティア組織
マディソン・メジャー・フォア・メジャーの支援

西 崎 緑

要 約

本稿では、ミシシッピ・デルタ地域の黒人農民の経済的・政治的自立を目指してファニー・ルウ・ヘイマーが設立した「フリーダム・ファーム協同組合」に焦点をあて、その特徴と北部市民の支援の実際を明らかにする。ヘイマーは、「食の自立が政治的自立をもたらす」と考え、フリーダム・ファームを創設した。その特徴は、分益小作から黒人農家を解放し、食糧の確保、住宅の確保、子どもたちの教育、職の紹介や福祉サービスの利用促進を持続的に実現するために、協同組合方式で農産物の生産と販売を行って資金を確保するというものであった。この事業のスタートアップ資金や、必要な機械・物品を支援したのが、ウィスコンシンの草の根ボランティア組織マディソン・メジャー・フォア・メジャーであった。彼らは、公民権運動に共感して連帯を示すリベラルな白人市民の組織であり、ミシシッピ州との往復も厭わず必要即応の支援を継続した。但し、社会構造の変革については一定の限界も持ち合わせていた。

キーワード：フリーダム・ファーム協同組合、マディソン・メジャー・フォア・メジャー

はじめに

公民権運動の最盛期から半世紀以上経過した現在でも、アメリカ社会は人種差別を乗り越えることができていない。そのことは、2020年5月にミネソタ州で起きたジョージ・フロイド頸部圧迫殺人事件をきっかけとして再燃した#Black Lives Matter運動が全米だけでなく世界中に広がったことからわかる。この運動が広がったのは、黒人たちが日々の生活で抑圧され、市民として安全に生きる権利を保障されていなかったことに加えて、コロナ禍での死亡率の高さに現れた「いのちの格差」を経験していたからである¹。

それでは長年続く人種差別に対して、黒人たちはどのように闘ってきたのであろうか。また社会の抑圧構造を解消・軽減するために、マジョリティである白人コミュニティはいかに努力してきたのか、あるいはしてこなかったのだろうか。

本稿では、人種差別との闘いの歴史のうち1960～70年代のミシシッピ州に焦点を当て、公民権運動の活動家であると同時に、コミュニティ・オーガナイザーでもあったファニー・ルウ・ヘイマーが、その闘いの方法の一つとして選択した「フリーダム・ファーム協同組合」に注目し、ヘイマーの自立についての考えを探る。またヘイマーとフリーダム・ファーム協同組合に対して、北部の草の根市民組織マディソン・メジャー・フォア・メジャーが行った支援活動がいかなるものであったのかを明らかにする。

具体的には、まず1) ミシシッピ・デルタ地域において黒人を抑圧し続けた社会状況を明らかにした上で、ヘイマーはどのようにして公民権運動に参加するに至ったのか、2) ヘイマーが目指した黒人コミュニティの自立は、なぜフリーダム・ファーム協同組合の設立を伴わなければならなかったのか、3) フリーダム・ファーム協同組合に対してウィスコンシン州の市民組織マディソン・メジャー・フォア・メジャーは、どのような支援を行ったのか、の3点について、主に史資料Fannie Lou Hamer papers及びMadison Measure for Measure Recordsをもとに描いてみることにする²。

1. デルタ地域の黒人抑圧と闘ったファニー・ルウ・ヘイマー

(1) 分益小作人の娘ファニー・ルウ・ヘイマーが経験した社会的抑圧

ファニー・ルウ・ヘイマーは、1917年10月6日ミシシッピ州モンゴメリー郡の分益小作人のタウンゼント家に20番目の子どもとして生まれた。彼女が2歳の時、一家は北西部のミシシッピ川とヤズー川に挟まれた「デルタ地帯」に移住し、E.W. プラントン・プランテーションで働いた³。分益小作人の家ではどこでもそうであったように、彼女も6歳から棉花畑で働いた。ただし他児に比べて幸運であったのは、12歳まで学校教育を受けることができたという点であった。彼女が学校教育で得た、この読み書き能力が、のちに黒人コミュニティのリーダーに彼女を押し上げていく。

さてヘイマーたちが暮らしたミシシッピ・デルタは、18世紀後半にホイットニー綿繰機が発明されて以来、プランテーション（大規模農場）での商業的棉花栽培が盛んになった地域である。その労働力として不可欠であったのが黒人奴隷であった。南北戦争以後、黒人たちは奴隷制度からは解放されたが、他に労働手段を持たない解放民たちの大半はプランテーションに残る以外に選択肢がなかった。また他所に一旦出た者も、プランテーションに逆戻りする場合もあった。そこで彼らを囲い込んで働かせるために白人経営者が考え出したのが、「分益小作制度」である。これは、生産した棉花の売却費用から土地代、種子代、肥料代、生活資金などを利息付で支払う制度である⁴。このシステムは一旦定着すると、黒人たちを借金漬けにすることになり、さらに次々に立法化された黒人法（Black Code）によって強化されていった。つまり黒人たちは、事実上奴隷時代と同様に生活範囲をプランテーションに制限され、過酷な労働を強制されることになったのである。ある分益小作人男性は、このように言う。「俺はこのデルタに30年も暮らしているが、毎年（白人たちが自分から）盗んでいくことを知っている。だが燃え盛る火にフライパンを投げ込むように、自分の怒りを爆発させたって何になるんだ。もし（俺のような黒人が白人に対して）質問すれば罵られるし、自分の権利を主張しようものなら銃で撃たれて、一卷の終わりだよ」⁵。

1944年ファニー・ルウはペリー（パップ）ハイマーと結婚した。夫婦はサンフラワー郡のB.D.マーロー・プランテーションで働くこととなった⁶。ハイマーの生活はそれ以前とさほど変わらなかったが、若干の違いがあるとなれば、その農場で読み書きができる唯一の黒人であったファニー・ルウは、タイム・キーパーを任されるようになったことである。

1961年、ハイマーは、白人女性の人生にはあり得なかったような悲劇に見舞われる。年々ひどくなる彼女の腹痛を心配した夫の勧めで、彼女は北部サンフラワー郡病院で子宮筋腫切除手術を受けたが、白人医師が彼女の同意なしに子宮を摘出してしまったのである⁷。この時期の南部では、黒人人口抑制と福祉サービスの費用節約のために、貧しい黒人女性に対して、同意なく不妊手術を課すことが日常的に行われており、黒人たちはこれを「ミシシッピ虫垂切除術」と呼んでいた⁸。

以上のような生活手段と人間の尊厳を剥奪されていたのが、深南部の貧しい黒人農民の日常生活であった。そして黒人を二級市民として隷属させる社会が、「平和な南部の社会」と白人たちは考えていたのであった。

（2）SNCCの有権者登録との出会い

ハイマーと公民権運動とのかかわりは、44歳のときに突然始まった。

1962年6月、学生非暴力調整委員会（Student Nonviolent Coordinating Committee、以下SNCC）は、有権者登録活動をミシシッピ・デルタにも拡大することを決定した。そこで、グリーンウッドを皮切りに、ルールヴィル、クリーヴランド、リバティ、その他人種隔離が強固な地区で、有権者登録のための「デルタ・プロジェクト」を開始した⁹。

その最中の1962年8月27日、ハイマーは、たまたま友人のメアリー・タッカーに誘われ、ルールヴィルのウィリアム・チャペル・宣教バプテスト教会で行われたSNCCの集会に参加した。そこで、初めて黒人が有権者登録をすることができると思った彼女は、早速ボランティアに志願し、8月31日に17人の黒人とともにインディアノーラの郡庁舎での有権者登録を試みた¹⁰。

帰宅後、プランテーションの主人マーロー氏から有権者登録を辞退するか、農園を出ていくかと迫られた彼女は、農園を出てSNCCの現場活動家として、黒人の有権者登録を進め、貧困者への連邦補助金制度申請を手伝うようになった¹¹。その後ヘイマーは、1963年6月サウスカロライナ州チャールストンで行われた南部キリスト教指導者会議（SCLC）主催の有権者登録ワークショップに参加し、その帰途、モンゴメリー郡ワイノナで警察に逮捕され、留置場で瀕死の重症を負うことになった。この時受けた暴行がもたで、彼女は、右の腎臓障害、左目の動脈血腫、足の障害に生涯苦しむことになった。

ヘイマーが公民権運動家として全米で有名になったのは、1964年の民主党全国大会での演説がきっかけである。州の民主党から排除されたヘイマーたち黒人有権者は、ミシシッピ自由民主党（Mississippi Freedom Democratic Party, MFDP）を結成し、代表を党大会に送りこんだ。夜のゴールデンタイムにTVの全国放送で流された彼女の演説は、ミシシッピ州の「制度的人種差別（institutional racism）」¹²とそれと闘う決意を明確に表していた。彼女は、「私は、最初に集会に参加して以来、ここで有権者登録のために働いてきました。1964年には、6万3千人のミシシッピ州の黒人が有権者登録をし、MFDPに投票しました。白人が私たちの有権者登録さえも阻止したため、私たちは自分たちの政党を組織しました。そして私たちは、民主党全国大会で白人の民主党に挑戦することを決めました」と語り、自分たちこそが正式な州代表であると主張した¹³。結果的にMFDPは代議員の椅子を獲得できなかったが、このパワフルな演説は、公民権運動に対する全国の関心を高め、北部や西部の「普通の」人々の公民権運動と彼女の活動への関心を高めたのであった。

2. 食の自立とフリーダム・ファーム

（1）食の自立が政治的自立をもたらす

ヘイマーの主張でユニークであった点は、ミシシッピ・デルタの「制度的人種差別」が黒人の生存を脅かしているという点であった。「彼ら（白人）は、

あなたに仕事を与えないというだけで、あなたを餓死させることができます。これらはミシシッピ州で現在起こっていることの一部です。ミシシッピ州の人々（黒人）は、未だに飢えており、今も荒廃して崩れそうな小屋に住んでいます。それがどのようなものかを知るには、経験することが必要でしょう。私の17歳の娘は、栄養失調で6週間入院したことがあります。でもそれは、私たちが怠けているからではありません。それは、私たちが一生懸命働いていなかったからでもありません。それは、私たちに仕事の対価が十分に支払われていないから生じたのです」(註 () 内は筆者追加)¹⁴。

当時、ミシシッピ・デルタでは、すでに黒人人口のかかなりの部分が北部や西部に移住した後だった。しかしハイマーは、黒人コミュニティ全体の生存のためには、黒人が南部に留まって、農業で自立すること、そして食糧を自分たちの手で自給しなければならないと考えていた。彼女がそう考えたのは、北部や西部の大都市に職を求めて移住した黒人たちが、人種差別的不動産約款によって黒人居住区に閉じ込められて過酷な生活を余儀なくされていたことを、親戚から伝え聞いていたからである。また彼女自身がミシシッピ・デルタにとどまった理由には、奴隷時代から自分の先祖たちが心血を注いだ土地を離れることができないという感情や、貧困と抑圧に苦しむ黒人たちを助けなければならないという義務感もあったのである¹⁵。

(2) 黒人貧農のニーズを充足するためのフリーダム・ファーム協同組合の実践

1969年、ハイマーは、黒人農民の生活自立のためにフリーダム・ファーム協同組合 (Freedom Farm Cooperation、FFC) を設立した¹⁶。その決断に至った背景には、まず「食糧は食べ終われば再び空腹になるだけですが、土地と鍬を与えれば二度と空腹にはなりません」という彼女の信念がある。そして経済的に豊かではない黒人農民が自分たちの力で農業を続けるためには、個人所有ではなく協同組合方式を採用するということに、現実性と将来性を見出していたからである。ハイマー自身の言葉に、次のような一節があ

る。「70年代以降、私たちが完全な自由という究極の目標に向かって進むにつれ、土地も重要になります。私は農地改革を信じており、共同所有を通じて土地を取得する措置を講じてきました。(中略)土地の共同所有は、コミュニティの資源を独占せず、コミュニティ全体を発展させる多くの機会へのトビラを開きます」¹⁷。

このような自立のためにコミュニティの協働を進めるという方策は、ヘイマーだけのアイデアではない。Whiteが指摘するように、黒人コミュニティの経済的発展のために黒人間の協力関係を推進すべきという考えは、すでに20世紀初めにW.E.B.デュボイスが提示していた¹⁸。彼は、1907年の第12回黒人問題研究会議で「アメリカ黒人間の経済的協力」と題した報告を行い、黒人コミュニティの中での長年にわたる経済的協力関係が、黒人の生存と解放に向けて多大な貢献をしてきたと述べた¹⁹。つまりデュボイスは、少額の資本しか持たない黒人たちが、教会、学校、慈善事業、葬儀屋、生命保険などを通じて、相互扶助的に必要な事業を行ってきたことを詳細なデータとともに示し、人種隔離が黒人コミュニティに経済的協力関係を強化する機会を与え、自立の意識を育てたことも指摘していた²⁰。

また黒人による科学的農業技術改善の努力のルーツを探ると、20世紀初めのタスキギ学院による農業技術巡回指導と農業大会に行きつく²¹。B.T.ワシントンがアラバマ州内の黒人農家や小作人の指導のために派遣したジョージ・ワシントン・カーヴァーは、「科学的農業」と黒人農家の実情に合わせた具体的解決策を指導し、黒人農家の生産性向上、土地の有効活用、健康維持に貢献した。また黒人農家の情報交換や協働も促進していった。

これら20世紀初めからの黒人コミュニティの協働の経験を背景に、ヘイマーのFFC以外にも1960年代末には協同組合方式の自立プロジェクトが開始されていった。たとえば1967年12月にミシシッピ・デルタのローズデール在住の黒人農家64人が、北ボリヴァ郡農民協同組合(North Bolivar Farmers Cooperative、NBFC)を設立し、失業中の黒人小作農を雇い、黒人家庭が食べるための野菜を生産するようになった。彼らが食糧生産に取り

組んだのは、黒人農家の栄養状態の改善のためであった。これは、当時マサチューセッツ州のタフツ大学がデルタの黒人農家の健康調査を行い、その結果、黒人農家の栄養状態が極めて悪く、そのために病気に罹りやすくなっていると発表したことが影響している²²。同じく1967年に南部協同組合連合（Federation of Southern Cooperatives、FSC）も組織された。FSCは、黒人農家に対して農地管理、機械化、肥料のやり方などを学ぶ機会を提供しただけでなく、ジョンソン政権の政策（「貧困戦争」と「偉大な社会」）の補助金を活用して多くの事業を手掛けていった²³。このようにFCC、NBFC、FSCのような協同組合は、少額の拠出金と全米の教会、一般市民、企業などから集めた寄付金をもとに、黒人農家の経済的安定と、住宅、教育、保健福祉サービスを提供し、それらの生活基盤安定策の上に、政治的自立を図る仕組みを作りあげようとした。

（3）フリーダム・ファーム協同組合（FFC）の運営の実際

フリーダム・ファーム協同組合（FFC）の1973年の経過報告と1975年予算書を見ると、設立は1969年で、1970年6月にミシシッピ州の正式な法人として認可されていた²⁴。FFCの目的は、サンフラワー郡の低所得農民（基本的には黒人農家）、とりわけ女性が世帯主になっている家庭を支援することであり、そのためにa）慈善事業（特に寄付金を集めて、食糧、衣服、住宅を必要としている、行き場を失った人々への救援のため食糧生産）を行い、b）組合員の社会的包摂の推進と道徳的・社会的状態の改善を行うと記述している。

前述の報告書と予算書によれば、FFCの事業で最大のものは「農業生産」で、初年度（1969年）には、40エーカーの土地をルールヴィルの西隣に購入して生産を始めている。当時サンフラワー郡では、連邦制度による救貧制度の一つのフード・スタンプ制度が未適用であったため、FFCの農場では貧困家庭のために野菜を栽培し、250家族に食糧が配布された²⁵。FFCは、食糧生産以外にも、栽培費用と土地のローンを賄うために棉花と大豆も栽培

し、当初の見込み通りの収穫を得ることができた²⁶。1970年には余剰食糧をシカゴの貧困街にトラックで運ぶまでに成長していた。この成功を機に、1971年1月には、頭金8万6千ドルの条件で郡内ドルゥ地区近くに680エーカーの農地を確保し、農場の運営を拡大することとなった。このうち134エーカーを綿花、40エーカーをきゅうり、20エーカーをトウモロコシ、10エーカーをインゲン豆、10エーカーをエンドウ豆、299エーカーを大豆の栽培に充て、組合員への食糧配布、農機具購入、土地のローン支払いを行った。しかし1972年以来、長雨のため収穫は落ち込み、銀行ローンの支払いが滞るようになった。1973年度のFFCの予算書では、支出予定の内訳が表1のよ

表1 1973年夏のフリーダム・ファーム予算書内訳

フリーダム・ファーム予算		
人件費	月額	年額
ディレクター	1,000	12,000
副ディレクター、資金集め担当者	900	19,800
秘書・経理担当者	500	6,000
農場管理者	500	6,000
農業労働者 (6人)	64/週	18,432
教育費		
奨学金 (6人)	300/人	1,800
福祉・救済		
フードスタンプ、洋服		5,000
農場必要経費		
棉花 (300 acres)	101.07	30,321
大豆(209 acres)	31.5	6,583
小麦(80 acres)	20	1,600
きゅうり(10 acres)	120	1,200
トウモロコシ(15 acres)	40	600
豆(10 acres)	30	300
かぼちゃ(10 acres)	30	300
オクラ(10 acres)	30	300
合計		110,236

*表作成は筆者。資料出所：Fund Raising-Misc. Records of Madison Measure for Measure, Box1. Folder. 4より。

うになっている。

FFCは、農場経営のほかにも黒人起業家支援、住宅、教育、就労支援などの事業を行った。このうち全国黒人女性協議会（NCNW）からの資金援助をもとに実施したのが、ドッツヴィル地区の縫製工場と豚銀行（Oink-OinkまたはPig Bank）事業である。前者は、販売実績が追い付かず1年足らずで廃止となった。それに対して後者（繁殖豚を農家に貸し出し、2頭の子豚で返す事業）は、1969年に50頭の豚から始め、1970年代半ばまでには郡内の300家族が利用し、現金収入や食糧として活用した。

住宅事業としては、1969年から1970年にかけて7000ドルを頭金としてFFCが投資して89戸の住宅を新築した。これは、農業の機械化によって農場を追い出された家族を救済するための住宅であった。この投資により、連邦農民住宅局（Farmers Home Administration）から80万ドルの住宅ローンを得ることが可能になった。FFCはそのほかに、ルールヴィルに3軒の既存住宅を購入し、災害等で家を失った家族が無料で住めるようにもした。

またFFCは、社会福祉機関としての役割も果たしていた。ヘイマーがFFCを設立した理由が黒人農家の生活支援であったことから、事業は農業生産にとどまらなかったのである。フード・スタンプの利用支援、公的扶助の手続き支援、医療の提供、子どもの衣類の提供、ヘッド・スタート（貧困家庭の幼児教育プログラム）への参加、竜巻被害者の救済など、多岐にわたる事業をヘイマーとボランティアが実施した。またヘイマーの影響力を活用して、黒人顧客を差別する商店に対するボイコットや、人種間対立の緩和のための仲裁も行った。

このようにヘイマーのリーダーシップの下で、FFCはサンフラワー郡の黒人農家の生活向上に貢献したが、それゆえに弱点も抱えていた。天候悪化による不作を原因として、FFCの経営は、財政的困難から抜け出すことができず、その埋め合わせにヘイマーは常に奔走していた。しかしヘイマーの健康状態は次第に悪化し、FFCは、1976年、ついに土地を売却し閉鎖せざるを得なかったのである。

3. マディソン・メジャー・フォア・メジャーの支援活動

FFCに大きな支援をしていた全国黒人女性協議会（NCNW）が支援を引き上げた後、それに代わる支援者として大きな役割を果たしたのが、ウィスコンシン州マディソン在住の市民による慈善組織マディソン・メジャー・フォア・メジャーであった²⁷。

(1) マディソン・メジャー・フォア・メジャーの設立経緯と特徴

マディソン・メジャー・フォア・メジャー（Madison Measure for Measure、以下M4M）は、1965年5月10日ウィスコンシン州都マディソンで結成された非営利のボランティア組織である。これは、1964から65年のフリーダム・サマーの時期に南部の状況を視察した市民が、ミシシッピ・デルタの黒人農民に対して長期的支援を行う必要を感じて創設したものである。M4Mは、1970年代末に解散するまで、市民のボランティア組織としては異例とも言えるほど多額の寄付や物品を集めた。彼らは、それをもとにフリーダム・ファーム協同組合や、それと同様に黒人たちが自立のために設立した北ボリヴァ郡協同組合の活動の援助を行った。

ウィスコンシン州の税控除の対象となる非営利団体の登録申請書によれば、M4Mの目的は、「公民権運動の慈善活動と教育的取り組みに財政的および物的支援を提供すること、アメリカ合衆国のすべての市民に対する法の平等な保護を促進すること、慈善活動および教育目的で公共の福祉への寄付を募り、受け取り、分配することである。これには、特定の党派や特定の指令に制限されない（non-partisan and non-directive）自由な出版物を刊行することや、公民権、投票、有権者登録、選挙、選挙法に関する問題について自由な報告を公表することを含む」と述べられていた²⁸。

M4Mの当初の基本姿勢は、「経済的自立（economic self-help）」と「コミュニティ開発（community development）」であったが、その原則に基づく支援を行うには、まず片づけなければならない問題があった。彼らは、南部の黒人コミュニティを訪問するうちに、より差し迫った生活ニーズがあるこ

とに気づき、食糧、衣類、子どもの学用品や書籍を届ける直接的支援と、ストライキ参加者の黒人への支援をまず実施することにした²⁹。たとえば1965年、ミシシッピ州ショー（Shaw）地域において、黒人棉花畑労働者がSNCCの後ろ盾を得て労働組合を結成し、賃上げ要求ストライキを行ったので、M4Mはスト参加者のための緊急闘争資金を送金している³⁰。

黒人児童への教育を充実させることもM4Mの関心事であった。たとえばジョンソン政権は、貧困戦争政策の一環として児童のための早期教育プログラム（ヘッドスタート）を実施したが、ミシシッピ州では州予算が十分に確保されず、実施が困難となっていた。そこでM4Mは、このヘッドスタートで使う書籍を集めてミシシッピ・デルタに届けている³¹。そのほか1967年9月17日の役員会では、デルタ地区全体で約5000人の児童が、洋服がないために学校に行くことができない、という問題が議題にのぼり、子どもたちを学校に通わせるために、子ども服を調達する必要とその方法が議論されている³²。

それではM4Mのメンバーは、どのような人々であり、どのような方法で資金を調達したのであろうか。彼らは、南部の黒人農民（特に分益小作人）が強固な人種差別に抗する闘いを支援して社会正義の実現を図ろうとする白人弁護士、キリスト教会の牧師、教会女性部のメンバー、ユダヤ教の聖職者など、中流階級のリベラルな人々であった。SNCCとのつながりも見られ、講演会の協賛なども行っている。当初の資金集めは個人の努力が主で、ガレッジ・セール、中古衣料集め、カクテル・パーティなどを夫々のメンバーが思いつくままに実施し、他のメンバーがそれに協力する形をとっていた。このような方法で集めた資金は、当然のことながら大きな金額にはならず、学用品や衣料、子どもへのクリスマスプレゼントなどの支援にとどまっていた。しかし1969年以後、「空腹からの解放を目指すアメリカ財団（the American Foundation for Freedom from Hunger）」の「発展のためのウォーク（Walks for Development）」を州内の他団体と協力しながら Wisconsin 州内各地で開催するようになり、多額の寄付金を集めることに成

功した。

フリーダム・ファームとの関係を見ると、ヘイマーとの書簡のやりとりも見られ、M4Mの支援は継続的に行われていたことがわかる。彼らは、トラックをレンタルして衣類や食糧をミシシッピに運んだほか、土地取得の費用や緊急的に必要となったの資金の援助を行っていた。前者（土地取得など大規模な資金の必要性）の例としては、フリーダム・ファームにおいて29万ドルで640エーカーの土地を購入する計画が持ち上がったとき、M4Mは、その支援を1970年8月19日の役員会で議論している。議事録によれば、頭金8万6千ドルのうち、2万2千ドルはすでに支払い済みであったことと、2万1千ドルをバッファローのグループからの寄附で賄う予定であることが報告され、M4Mから7500ドルを支払うとの提案があり、承認していた。そして残りの3万7500ドルをミルウォーキーとマディソンの他団体（YWD）に寄附を呼び掛けるとしていた³³。後者（緊急支援）の例としては、ヘイマーからフリーダム・ファームの運転資金1500ドルの緊急支援が要請されたときの対応である。この要請が1971年5月18日の会合で報告され、財団から助成金を得られない場合には、M4Mが1500ドルを送金することが決議されていた³⁴。

先述の「発展のためのワーク」によって集めた資金は、大型トラクターなどの農機具を調達に使われた。フリーダム・ファームは、クリーヴランドのフォード・トラクター会社から5万7千ドルで農機具を購入したが、2万5千から3万ドルをまず期限内に支払う必要があった。そのため「ワーク」で集めた資金4万1千5百ドルから4万ドルを支払いに充てることを役員会で決定していた³⁵。

以上のようにM4Mは、リベラルな白人中産階級で公民権運動に触発された人々が、ボランティア団体としてこれを設立し、日常的な資金集めと他団体や財団との交流を持ちつつ、フリーダム・ファームの必要に応じた支援を行っていたことがわかる。

(2) 南北の橋渡しとしての活動

M4Mは、表2のようなスケジュールで、頻繁に南部（特にミシシッピ・デルタ）を訪れている。彼らは、メンバー個人の所有している自動車やレンタカー（トラック）を使ってウィスコンシンからミシシッピまで自分たちが運転し、衣類、事務用品（事務所で使用する謄写版等）、縫製作業用ミシン、ヘッドスタートのための本、学用品などを運んでいた。M4Mの役員会の議事録を見ると、これら活動について、寄付の集め方、品物の運搬の仕方、カクテル・パーティの準備、ミシシッピから寄せられる品物のリクエストにどのような方法で応えるかが議論されていた。

1966年1月18日の役員会では、時の情勢に対する南部の黒人の意見を直接聴くことになる。役員の一入であるケネス・フリオウ牧師が、ミシシッピ自由民主党(MFDP)のジョン・サムロールを連れてきたからである。サムロールは、自動車やトラクターを購入するための寄付を募るためにマディソンに来ていた。彼は、「アメリカ人はベトナム問題より、自分の国の社会問題をもっと考えるべきである」と述べ、より多くの白人市民が海外のことより、国内の同胞であるミシシッピの黒人たちの状況に関心を持つ必要があると説いた。議事録には、その後サムロールは、ミシシッピに帰るときにM4Mの物品を運ぶことを申し出ていることが記載されていたが、メンバーの反応は不明である。

M4Mのメンバーは、ミシシッピ州との間を何度も往復しているうちに、現地の状況を次第に理解するようになった。そのためアウトリーチ的な支援も検討するようになった。たとえば学齢期に教育機会を逸した黒人児童をウィスコンシンで教育を受けさせたいというアイデアも出てくるようになり、1967年10月22日の役員会では、15歳の黒人少年をマディソンに連れてきて中断していた分の教育を受けさせたいという意見が検討されている³⁶。その後この少年は、マディソンで教育を受けることができた。

南部の黒人の状況をウィスコンシンの一般市民に知らせる努力として、彼らは、1971年1月にウィスコンシン大学マディソン校でファニー・ルウ・ハ

表2 Madison Measure for Measureの南部への訪問と
ヘイマーの北部訪問（活動初期1965-68）

月日	内容
1965.5.22	ウェスト・ヘレナ（アーカンソー州）
1965.8.11	ウェスト・ヘレナの児童のための遊具購入
1965.8.17	ウェスト・ヘレナ（アーカンソー州）遊具と黒板を運搬
1965.9	ウェスト・ヘレナの学校と事務所あてに謄写版、衣服を発送
1965.11	マルクス（ミシシッピ州）に衣服を運搬
1966.3.18	南部訪問
1966.4.18	南部訪問
1966.5.13-15	ポリヴァ（ミシシッピ州）に衣服を運搬
1966.11.30-12.6	ローズデール、クリーヴランド、ポリヴァ郡、フリーダム・シティ、ストライク・シティ（ミシシッピ州）を訪問し、現地の組織との関係を結び、全体の計画を見直す
1967.10.13-16	トレーラーを借りてローズデール訪問。謄写版、ヘッドスタートのための本（90kg相当）、衣類（1350kg相当）を運搬
1967.10.23	200ドルをポリヴァ郡の有権者登録支援活動のためにローズデール宛てに送金
1967.12.20-23	トレーラーを借りてローズデール訪問。食糧、218名のヘッドスタート受講児童のためのクリスマスプレゼント、衣類（1800kg相当）を運搬
1968.3.28-4.3	ホーリー・スプリング（ラスト短大）、グレナダ、ルールヴィル、クリーヴランド、ローズデール訪問、4500個の品物、ラスト短大のための教科書、衣類500枚（グレナダとクリーヴランド向け）、衣類1500枚（ルールヴィルとローズデール向け）、ラスト短大のオックスフォード協同組合にミシン1台、ルールヴィルのヘッドスタートに謄写版1台
1968.4.26-5.2	ファニー・ルウ・ヘイマーがM4Mのゲストとしてマディソンを訪問。資金集めのために、マディソン、ミルウォーキー、ペロワで教育ミーティングを開催し、必要経費を除いて合計で1625ドルを集める。
1968.5.10-13	ルールヴィル訪問。衣服3000枚、ルールヴィル住民のための本200冊を運搬
1968.5.10-13	ローズデール訪問。ポリヴァ協同組合のために衣服3000枚を運搬
1968.5.23-27	ローズデール訪問。4000枚の衣服と家内用品、ヘッドスタートセンターのため本100冊を運搬
1968.6.10	サウスカロライナのレア・ハインのフィールドワークのために50ドル送金
1968.6.20-24	ホーリー・スプリング、ルールヴィル、ローズデール訪問、ラスト短大のための教科書500冊、ルールヴィルのポストンセンターに百科事典、ミシン、ルールヴィルのヘッドスタートに本100冊、ローズデールの協同組合に衣服3000枚とタイプライターを運搬
1968.7.11	700ドルをサンフラワー郡フード・スタンプ基金に送金。M4M寄付金目標を4800ドルに設定
1968.7.15	オックスフォードの成人教育のために20ドル分の消費者教育冊子を購入
1968.8.	書籍梱包、1500冊をキャロル・シティ、1000冊をグレナダに発送
1968.8.15-22	ローズデール、マウンド・ベイコー、ルールヴィル、クリーヴランド、グレナダ訪問。衣服3000枚、靴500足、ローズデールに足踏みミシン1台、ルールヴィルにミシン（足踏み2、電動1）

資料：Records of Madison Measure for Measure, Box1. Folder1.より一部抜粋。西崎翻訳。

イマーの歴史的演説会「私が自由になるまでは、あなたも自由ではない」を実施した。ヘイマーは、40分間の演説の中で、自分の半生を通して黒人の置かれた状況を聴衆に知らせるとともに、白人の自由は黒人の自由で鎖でつながれており、「私が自由になるまで、あなたも自由ではありません」と語った。このメッセージは、(伝統的に進歩派が多かった) マディソンの市民に、社会正義の実現とミシシッピの黒人たちの支援を考えさせることになった。

おわりに

1960年代末から1970年代初めにかけて、黒人の社会運動の中心は政治的権利獲得を目指すものから経済的機会の獲得を目指すものに移ってきていた。1968年4月4日にキング牧師が暗殺されたとき、彼と南部キリスト教指導者会議が計画していたのは、「貧者の行進」であった。この「貧者の行進」が企画されたのは、連邦政府の貧困対策が十分に黒人たちの生活を向上させていなかったからである。ジョンソン政権の「貧困戦争」政策は、もともとの連邦政府の予算が少なかった上に、州政府の予算も十分に投入されなかったため、末端の現場では事業の効果が発揮されなかった。つまりこの時代になっても、黒人コミュニティの生存には、彼らの自助努力が欠かせなかったのである。特にミシシッピ州のように、深南部の徹底した人種隔離政策と黒人の経済的機会が常に奪われてきた地域では、フリーダム・ファーム協同組合のような組織を作り、そのメンバーのエンパワメントを図っていく以外に、黒人農家の自立は困難であった。ヘイマーは、自分の生活経験から協同組合方式の有効性を信じて、フリーダム・ファームを創設した。しかし、天候に左右される農業は、安定的な収入を得ることが難しく、農業での自立の取り組みは成功しなかった。

一方、北部白人市民から南部の黒人への支援は、まずSNCCのフリーダム・サマーに参加したユダヤ人や東部の学生たちのように、直接的な社会変革を実現させようとする活動があった。それらの活動の内容と参加者の反応は、先行研究により明らかにされている³⁷。他方、南部の黒人農民を支援し

ようとするマディソン・メジャー・フォア・メジャーのようなりべラルな中流白人の活動もあり、それらについては今後も研究が進められる必要がある。本稿を通して、彼らの活動は、黒人コミュニティの自助活動支援を中心としたものであり、「人間としてのニーズ充足」を目指すものであったことは分かってきた。またM4Mは、ミシシッピに出かけて現場の黒人との交流を大切に、必要即応への努力を惜しまず行っていたことも分かった。

それでもなお、人種差別の解決と黒人の社会的地位向上のためには、大きな課題があった。ディアンジェロが『ホホワイト・フラジリティ』の中で指摘するように、北部の白人たちは、M4Mのメンバーでさえも、本当の意味で人種差別とは向き合えていなかった³⁸。なぜなら、南部の黒人たちの人権を蹂躪し続けてきたアメリカ社会の主流である自らの責任について自覚し、社会変革を実現しなければならないという意識に到達するには相当の困難が伴うからであった。

注

- 1 人種、性別、年齢を越えて、多くの市民が参加した、BLM運動で参加者たちが糾弾したのは、「制度的・組織的人種差別 (institutional racism)」である。坂下史子は、「BLMのL (ライヴズ) は、単に命だけを指すのではない。後述するように、奴隷制から人種隔離制度、現代の刑罰制度まで、黒人を社会の底辺に据え置くための仕組みが時代ごとに形を変え、連続と続いてきた歴史 (そしてその変革を求めるBLMの立場) を踏まえると、「ライヴズ」とは黒人が平等かつ安心安全に暮らせる権利全般—生と命—を指していることが分かる。」と指摘している。
https://www.jinken-net.com/close-up/20220104_2860.html#:~:text=%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A%E7%A6%8D%E3%81%A7%E3%81%AE%E5%A4%A7,%E3%81%8C%E5%A4%9A%E7%99%BA%E3%81%97%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%9F%E3%80%82. 2023年 7月 5日最終アクセス。

新型コロナと「いのちの格差」については、NPO法人アジア太平洋資料センター(2023)「新型コロナが映す いのちの格差—公正な医療アクセスを求める世界の市民社会」参照。http://www.parc-jp.org/video/sakuhin/inochi.html 2023年7月16日最終アクセス。

2 *FANNIE LOU HAMER: PAPERS OF A CIVIL RIGHTS ACTIVIST, POLITICAL ACTIVIST, AND WOMAN*, Gale Archives Unbound (原資料: Fannie Lou Hamer papers, at Amistad Research Center, Tulane University)

Madison Measure for Measure Records, 1965-1977, at Wisconsin Historical Society.

3 Fannie Lou Hamer's America: THE OFFICIAL WEBSITE OF THE AWARD-WINNING FILM AND THE FANNIE LOU HAMER EDUCATIONAL RESOURCE CENTER. <https://www.fannielouhamersamerica.com/fannie-lou-hamer-resource-center/family-tree> 最終アクセス2023年5月24日。

4 分益小作制度(シェアクロッピング)の導入については、以下を参照。紀平英作編(1999)『アメリカ史』山川出版、202。

5 Hine, Darlene Clark, Hine William C., Harrold Stanley (2000) *The African-American Odyssey*, Prentice Hall. 324 (西崎翻訳)

6 実は、彼女は1938年20歳のときにCharlie Grayという男性を結婚したという記録があるが、妻が他の男のもとに走ったという理由で1943年にGrayから離婚の申し立てが裁判所に提出されている。(前述のFannie Lou Hamer's America)

7 子宮を摘出される前にハイマーは少なくとも2回流産を経験しており、また多嚢胞性卵巣症候群でもあったので妊娠が困難であった。(前述のFannie Lou Hamer's America)

8 ハイマーは、3年後ワシントンD.C.で講演を行った際、北部サンフラワー病院にかかった黒人女性は10人に6人の割合でインフォームド・コ

ンセントなしに断種手術を施されていたと言っていた。“Fannie Lou Hamer”. Edited by Debra Michaels, National Women’s History Museum.

<https://www.womenshistory.org/education-resources/biographies/fannie-lou-hamer>. 2021年2月20日最終アクセス.

Cahn, Susan K. (2007) *Sexual Reckonings: Southern Girls in a Troubling Age*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. p.174.

1907年インディアナ州が合衆国で最初に断種法を施行して以来、断種法は各州に広がり、知的障害、受刑者、マイノリティに強制的断種が実施されてきた。ミシシッピ州でも1928年に断種法が施行され、ミシシッピ州立病院において断種手術が実行された。優生学を理由とした手術件数は人口10万人あたり3人とされている（Cahn, Susan K. 2007. *Sexual Reckonings: Southern Girls in a Troubling Age*. Cambridge. Harvard University Press.）。ミシシッピ州における黒人人口制御のための断種手術件数は不明である。しかし、1960年代の連邦政府の貧困戦争プログラムの実施過程で、黒人女性や少女が同意なき断種手術を施されることが全国で行われていたことは、Relf v. Weinberger裁判で明らかになった。

9 これには、全国黒人地位向上協会（NAACP）ミシシッピ州クリーヴランド支部のリーダーであるアムジー・ムーアが、黒人が人口の3分の2を占めるミシシッピ・デルタ地域での有権者登録には、学生たちのエネルギーが必要だと、SNCCのボブ・モーゼスを説得したことがある。無論、SNCCは、人種統合を阻止しようとする市民協議会（Citizens’ Council）やKKK、それに賛同する行政や警察によって暴力的な抵抗に遭遇する。

10 ハイマーは、有権者登録ボランティアになった経緯を次のように話している。「それまで、私は集会というものを聞いたことがなく、黒人が

有権者登録して投票できることを知りませんでした。その集会は、ボブ・モーゼス、レジー・ロビンソン、ジム・ベベル、ジェームズ・フォルマンなどのSNCCの人たちが開催していました。彼らが、翌日、郡庁舎に行く人たちは手を挙げてほしいと言ったとき、私は自分の手を挙げました」資料出所：「私たちの橋を称賛する (*To Praise Our Bridges*)」ファニー・ルー・ハイマー夫人の自伝 (ハイマーの話を録音の上、SNCCのジュリアス・レスターとメアリ・ヴァレラが編集) p.12. (Fannie Lou Hamer Collection. Box.1 Folder 2. Mississippi Department of Archives and History)

- 11 有権者登録を理由にプランテーションから黒人を追い出すやり方は、ミシシッピ・デルタと隣接するテネシー州南西部のファイエット郡とハイウッド郡で1960年から始まった。(Aiken, Charles S. *The Cotton Plantation South since the Civil War*. Hopkins Open Publishing: Encore Edition; Illustrated版2020. pp.223-224) 9月10日の夜、ハイマーが一時滞在したタッカー家が銃撃され、16発の弾丸が撃ち込まれたが、幸い誰もが無事であった。同夜、2人の黒人女性が殺され、ジョー・マクドナルドの家も銃撃された。ハイマーは、危険を感じた夫の知らせで他家に逃れていた。
- 12 組織的人種差別 (systemic racism) とも言う。SNCCのストークリー・カーマイケルによって概念化された用語である。カーマイケルは、個人的差別感情 (individual racism) に対して、社会の仕組みや制度の中に特定の人種 (特に黒人) を差別・排除する仕組みが組み込まれていて、実質的不利益を与え続けているにもかかわらず、それが当たり前機能しているためにマジョリティ (特に白人) が気づかないことを問題にした。以後、学術誌や雑誌、新聞でも、制度的人種差別は、個人的人種差別と区別して使用されている。
- 13 *To Praise our Bridges*. pp.16-17.
- 14 “Freedom Farm Cooperative | Fannie Lou Hamer’s America”

- PBS U.S. History Collection. <https://www.pbslearningmedia.org/resource/arf22flha-soc-freedomfarm/freedom-farm-cooperative-fannie-lou-hamers-america/> 2023年5月21日最終アクセス。
- 15 Brooks, Maegan Parker (2020) *Fannie Lou Hamer: America's Freedom Fighting Woman*. Rowman & Little Field. p.143.
- 16 FFCの設立年については、*Freedom Farm Corporation Proposal for Funding*, 1975の設立年に依拠したが、Whiteの記述 (p.65) では、1967年となっている。White, Monica M. (2019) *Freedom Farmers: Agricultural Resistance and the Black Freedom Movement (Justice, Power, and Politics)*. University of North Carolina Press.
- 17 “If the Name of the Game Is Survive, Survive,”: Speech Delivered in Ruleville, Mississippi, September 27, 1971.
- 18 White前掲書 pp.52-61.
- 19 カーネギー財団とアトランタ大学がデュボイスに依頼した南部の黒人たちの調査は、毎年の黒人問題に関する会議で報告され、12巻の詳細な報告書となっていた。とりわけ1907年報告でデュボイスが用いた資料には、アフリカ、西インド諸島、植民地の調査、アメリカ黒人の教会の各宗派の成長、収入、資産、出版物、学校設立のための寄付などのデータ、保険会社や秘密結社に関する資料が含まれていた。*Economic Cooperation among Negro Americans*. Report of a Study made by Atlanta University, under the Patronage of the Carnegie Institution of Washington, D.C., together with the Proceedings of the 12th Conference for the Study of the Negro Problems, held at Atlanta University, on Tuesday, May the 28th, 1907. Atlanta, Ga.: The Atlanta University Press, 1907.
- 20 White, pp.54-55.
- 21 これは、アメリカ農業省 (USDA) が1902年に開始した協同農場の取り組みに関して、B.T.ワシントンが黒人農家に対する指導部分を請け

- 負うことに成功したことによるタスキギ学院の農業巡回指導については、White、pp.38-48. 西崎緑 (2001) 「差別社会における自立支援：Booker T. Washingtonの再評価」『福岡教育大学紀要第二分冊、社会科学編』77-78. 参照。
- 22 White, pp.93-96.
- 23 FSCは、9つの州で結成されていた22の協同組合をメンバーとするアンブレラ組織で、黒人コミュニティが白人支配の南部経済から独立できるようにする、という目標があった。https://nesawg.org/news/model-network-federation-of-southern-cooperatives. 2023年5月28日最終アクセス。
- 24 *Progress Report 1973. Proposal for Funding, 1975*. Freedom Farms Corporation (FFC) Series: Proposals. Folder 23. In Gale Primary Sources Archives Unbound “Fannie Lou Hamer: Papers of a Civil Rights Activist, Political Activist, and Woman.” 法人本部は、ヘイマーの居所であるルールヴィルに置かれた。
- 25 フード・スタンプは、もともと1939年に余剰農産物を処分するために設けられたが、1960年代には、貧困家庭の栄養補助事業として刷新され、ジョンソン大統領がこれを経常的事業とした。
- 26 250家族が食糧配布の対象となった。
- 27 Measure for Measureはシェークスピアの演劇『尺には尺を』を引用したものと思われるが、この団体の由来の説明には、ミルウォーキーの市民団体がその名前を用いていたことから採用したということだけが記載されていたので、演劇との関係は定かではない。(1965年5月10日の会議でマージョリー・コルソンが名称使用についてミルウォーキーの了解を得たと発言したことが記録されている)。本文中のM4Mの説明については、Wisconsin Historical Society所蔵のMadison Measure for Measure Records, 1965-1977とそれについての概要説明に依拠した。
https://digicoll.library.wisc.edu/cgi/f/findaid/findaid-idx?c=wiarchiv

- es;cc=wiarchives;view=text;rgn=main;didno=uw-whs-mss00493
- 28 Charitable Organization Registration Statement (May 19, 1965の受領印あり) MSS493 m4m The Organization By-laws, articles of incorporation Box1, Folder1.
 - 29 この時の支援対象は、アーカンソー州セントヘレナの黒人たちや、SNCCの夏季学校であった。
 - 30 ミシシッピ自由労働組合については、<https://snccdigital.org/events/mississippi-freedom-labor-union-founded/>を参照。
 - 31 ヘッドスタートは、ジョンソン大統領の貧困戦争政策の1つとして1965年に開始され、低所得層の就学前児童に教育、健康、栄養のサービス提供を行うものであった。
 - 32 Board of Directors Meeting, September 17, 1967. M4M Board Minutes, 1967, 1968. Box1, Folder 3.
 - 33 Minutes for Madison Measure for Measure, Inc. Membership Meeting, 19 August 1970. Box1, Folder 4.
 - 34 Minutes for Madison Measure for Measure, Inc.—Annual Election of Officers and Membership Meeting, 18 May 1971. Box1. Folder. 5
 - 35 Minutes for Madison Measure for Measure, Inc.—Membership Meeting, 16 July 1971. Box1, Folder 5.
 - 36 Board of Directors Meeting, October 22,1967. M4M Board Minutes. 1967,1968. Box1, Folder 3.
 - 37 ユダヤ人の学生たちの公民権運動への参加については、北美幸 (2016) 『公民権運動の歩兵たち：黒人差別と闘った白人女子学生の日記』彩流社を参照。
 - 38 ロビン・ディアンジェロ 著、貴堂嘉之 監訳、上田勢子 訳 (2021) 『ホワイト・フラジリティ：私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか?』明石書店。

**Fannie Lou Hamer's Freedom Farm Cooperative and Supports given
by Madison Measure for Measure, a grassroots volunteer organization**
NISHIZAKI Midori

Abstract

This paper focuses on “the Freedom Farm Cooperative” and Madison Measure for Measure, a volunteer organization. The Freedom Farm Cooperative was founded by Fanny Lou Hamer in the Mississippi Delta region. She created this cooperative because she believed that black farmers would get political and economic independence if they could get food independence. To liberate black farmers from sharecropping system, the Freedom Farm Cooperative was designed to secure food and housing, to help children's education, to introduce jobs, and to promote use of welfare services. Madison Measure for Measure, Inc. provided start-up funds as well as the necessary equipment and supplies for the Freedom Farm Cooperative. The members of this organization were mainly liberal white citizens who sympathized with the civil rights movement. However, there was a limit for them to reform social structure.

Keywords: Freedom Farm Cooperative, Madison Measure for Measure